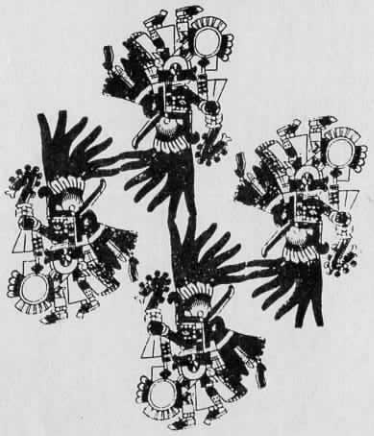
祖国を撃て

獄中兵士書簡集 2

荒井まり子
黒川芳正
大道寺将司

東アジア反日武装戦線KF部隊(準)



発行日／1981年5月19日

発　行／東アジア反日武装戦線KF部隊(準)
荒井まり子，黒川芳正，大道寺将司
(葛飾区小菅1-35-1　東京拘置所)

連絡先／KQ通信社
東京都下谷郵便局私書箱　99号
TEL　03-891-7047

400円

目次

博徒と権力の関係について	黒川よりGさんへ……	1
ともに祖国を絞め殺す戦いを！	黒川よりAさんへ……	6
連合赤軍はなぜ隊内処刑を行なったのか？	黒川よりGさんへ……	9
食料自給と日帝撃滅	大道寺よりGさんへ……	14
ピノチェト来日阻止に向けての闘いをおし進めよう！	大道寺より木田同志へ…	24
杉村さんへ	荒井より杉村さんへ……	33
あとがき	……	43

表紙カット…東拘在監　羽　原　興　起

博徒と権力の関係について

黒川よりGさんへ

80年9月8日付

今回は、博徒と権力の関係について考えてみます。

幕末期には、博徒集団の系譜は、大きく分けておおよそ三つか四つあったようです。一つは、武士階級最末端の足軽部屋頭から博徒に転じたもの。この連中は、上級藩士に付属して雑用をつかさどる足軽部屋で、足軽人足を集めて、藩権力認許のもとで賭場を開き、のちに、町方に出て町人相手に賭場を開くようになっていたようです。この系譜の博徒は、その出生の経緯から見てもわかるように、藩権力と裏で密接に結びついていたようです。

次の系譜は、岡っ引（目明し）となった博徒です。藩権力は、警察力の弱さを補うために、博徒を役人の手先にとりたてて、「犯罪」の取締りに利用した訳です。これがいわゆる〝二足のワラジ〟ですね。この連中は、お上の威光を利用して、自分の費場所の拡張をはかり、勢力を拡大していった訳で、これまた藩権力と結びついている訳です。

この二つの系譜の体制的博徒に対して、藩権力とは一切結びつきがなく、藩権力から目の仇にされていたのが、農村を根城とした田舎博徒（草博徒）です。この連中は、百姓相手の野会博徒のわずかな「かすり」を収入源としていて、藩権力による博徒狩りの際には、真先に逮捕されて痛めつけられていた訳で、それだけに新陳代謝の激しい田舎博徒の小一家が、数多く農村のなかに生まれていたようです。清水の次郎長などの凶状もちの流れ博徒は、たれこみのおそれのない顔見知りの田舎博徒を、ひそかに訪ね回っていたということです。

以上三つの系譜が、一家をかまえて勢力を張った博徒であるとすれば、四つ目は、流れ博徒の系譜ですね。この流れ博徒のなかには、凶状もちが多く、藩権力につけ狙われた、文字どうりのアウトローであったのだと思い

ます。

幕末から「明治維新」にかけての激動期において、尾張藩では、同藩内外の博徒をとりたてて、尾張草莽隊という軍事組織をつくったと言うことです。尾張藩は、倒幕派として出兵した訳ですが、第一に、可能な限り正規の藩兵の消耗を回避し温存するため、第二に、天下太平の世の中で、体を張った戦闘経験のないふやけた武士よりも、血で血を洗う縄張り争いできたえられた博徒の方が、その団結力、統制力においても、その戦闘力、戦闘経験においても、志気の点においても、優っていると判断し、前科黙認・士族採用をエサに、藩の勤王実績をあげるための捨石として、博徒を利用した訳です。この尾張草莽隊は、先に指摘した四つの系譜の博徒を、ほぼ全部網羅しているようです。

尾張藩兵の戦闘参加人数は約二千名と推定されていて、そのうち草莽隊員は四九三名で22%に当っている訳ですが、戦闘による戦死者は、尾張藩全体で二六名、そのうち軍夫一〇名を除く一六名中草莽隊員は九名、57%を占め、その戦死率は一般藩士の四倍強に相当しています。このことからも、博徒で構成された草莽隊が、戦闘の最も激しい危険な部署に投入され、文字どうり捨石として、消耗品として利用されたということは明らかです。

このようにして、幕府打倒の戦争で、大きな力を発揮したにもかかわらず、戦争が終わり明治天皇制権力がうち固められていく過程で、博徒で構成された草莽隊は切り捨てられていきます。用済みで解散された草莽隊員のある部分は、都市下層プロレタリアに転化して窮民化し、ある部分は専業博徒にもどっていったようです。

明治天皇制国家権力と、博徒

一八八四年（明治一七年）を中心としたこの時期は、秩父困民党をはじめとして、散発的ではあれ、全国的に武装蜂起が起っています。従来の歴史解釈では、自由党左派が主導したように言われていますが、注目すべきことには、いずれの場合にも、博徒が積極的な役割を果しているということです。ではなぜこの時期の反体制運動に博徒が積極的に参加したのか、ということなのですが、これは明治天皇制国家権力による、博徒に対する弾圧に関係があるのではないか、と思います。

この一八八四年には、〃明治一七年の大刈込〃と称される、博徒取締りの大弾圧がありました。愛知県（旧尾張藩）の〃博徒大刈込〃は、実質的にはすでに一八八三年の五月ごろから始められ、一八八四年一月の太政官布告として出された『賭博犯処分規則』によって、警察の行政措置で処罰することが可能となるや、二月から五月にかけて博徒の検挙は頂点に達します。注目すべきことには、愛知県に四〇もの博徒集団のあったなかで、縄張り争いのさい、常に血なまぐさい集団的戦闘力を発揮してきた一家だけが、〃大刈込〃の対象として、狙い撃ちにされているということです。さらにその狙い撃ちにされた一家は、幕府打倒の戦争の際、尾張草莽隊を構成していた博徒集団であったということです。

すなわち、倒幕派の藩権力は、幕府打倒の戦争の際には、オノレの脆弱な軍事力を補完し、藩権力を温存するための、犠牲の肩代りとして、もっとも戦闘的な博徒集団を選別してこれを利用した訳ですが、明治天皇制国家権力は、激化しつつある農民叛乱や自由民権運動へ、民間で唯一武装した集団である博徒が参加し、その武器が権力に向けられるのを防ぐため、「賭博犯処分規則」という法律をつくり、予防弾圧を行なったということなのです。

明治天皇制国家権力がおそれていたのは、なによりも、博徒集団が、当時民間に存在していたいかなる集団よりも多量の武器を所蔵し、いかなる集団よりも組織戦闘の経験を数多くもち、強固な結束力と行動力をもった命知らずの集団であったということ、そして当時の博徒が、階層的には、中貧農または都市下層プロレタリアと結びついており、進行しつつあった土地収奪と税金攻勢のなかで、明らかに反体制の側へ流れる可能性をもった武装集団であったことです。

しかし、〃明治の刀狩り〃と言える、この〃大狩り込み〃は、博徒集団の反体制運動への流入をおさえるどころか、結果的には、むしろ、促進する役割を果したと言えます。親分を検挙されて一家壊滅し、賃場所に賭場が立てられず、寺銭に寄食する糧道を絶たれて、自らも追われる身となった博徒たちは、他府県に流れながら、権力に怨みをもった煽動者・組織者として、貧農や都市下層プロレタリアの生活圏に浸透していったのです。

このような情勢を背景として、愛知県では、反体制的博徒を主体とした「名古屋事件」というのが起こります。これは、「四日市ノ三菱会社」を砲撃するため、また、「現日本政府ヲ転覆セン事ヲ目的」とした、軍資金調達のための強制収奪闘争、いわゆる〃M作戦〃です。この

連続的な強制収奪闘争の主体となったのは、幕末の尾張草莽隊の流れをくむ博徒であり、〝大刈込み〟によって糧道を絶たれた他国からの流れ者的博徒であり、窮民化しつつあった貧農・都市下層プロレタリアで、攻撃目標となったのは、高利貸的性格をもった豪商・豪農層ということです。

この集団は、残念ながら弾圧され壊滅してしまいます。そして、これ以降、日本の博徒集団は、アウトローはアウトローでも、右へ右へと流れていったようです。そのような意味で、この一八八四年を中心とした時期は、日本の博徒集団が最も「革命的」であった時期と言えるかもしれませんね。

一九四五年以降のヤクザ

ヤクザ集団が、国家権力の都合によって、あるいは利用され、あるいは切り捨てられて弾圧されるといった例は、一九四五年以降にもありますね。しかし戦後の場合、ヤクザ集団は、反体制の側には流れず、マフィア（非合法企業）化していったのではないでしょうか。

いわゆる60年安保闘争の後、児玉誉士夫が、東西のヤクザ組織を結集して、全国的な右翼反革命団体をつくろうとして破綻し、その替りに、関東のヤクザ組織のみを結集して関東会をつくったということは知っていると思います。綱領には「共産主義に対し、これを撲滅すべく全面的に闘争を挑み、また国民の愛国精神を発揮する」とうたわれているとか……。当時の構成団体は博徒系七団体――錦政会、住吉会、松葉会、日本国粋会、義人党、東声会、北星会ですね。これによって、児玉誉士夫は、ヤクザ組織の右翼団体化を計ろうとしたようですが、実質的には、自民党・党人派の院外私兵集団として利用しようとしたのでしょう。しかし、この関東会がすこしはしゃぎすぎて、刺激が強すぎたためか、危機感を抱いた自民党・官僚派のヘゲモニーのもとで、一九六四年から「第一次頂上作戦」と称する、ヤクザ組織に対する「組つぶし」の弾圧がはじまります。

この弾圧は、ヤクザ組織が巨大化し広域化して力をつけ、独占資本の利益をおびやかすに至ったがゆえに、独占資本が、自民党・官僚派を通して、独占資本の利益をむしりとるヤクザ組織を叩いた、という経済的背景もあったようです。もう一つの理由は、もはや60年安保闘争の時のように民間の反革命勢力を利用するまでもなく、

警察力と自衛隊の力のみで、革命勢力を抑圧し得るほど国家権力が強大化したということ、そして、革命勢力の主力部隊とされてきた労働者階級自体が十分体制内化したため、スト破りなどでの民間反革命勢力の利用価値もさほどなくなってきたということだと思います。

かくして、警察・マスコミ・市民が一体となった反「暴力団」キャンペーンを背景とした「第一次頂上作戦」なるものが開始されていった訳です。この「第一次頂上作戦」によって、警察権力は、五七団体一、七七五人を解散させ、三一一団体五、四〇〇人を壊滅状態においこみ、事務所を閉鎖したもの三一団体七四八人という「成果」をあげたそうです。

「明治」の弾圧で、ヤクザは、貧農や都市下層プロレタリアと合流し、反体制・反権力闘争へと積極的に参加していきました。しかし「昭和」の弾圧では、そのようなことは起こり得ませんでした。それはなぜかと言えば、戦後のヤクザが、反体制・反権力闘争へ合流するには、あまりにも資本主義的に堕落し切っていたためであり、また合流すべき貧農や都市下層プロレタリアの革命的闘争が存在していなかったからだと思います。それゆえ、弾圧されたヤクザが行きつく先と言えば、心情的には市民社会への怨念をつのらせつつ、より巧妙な非合法のブルジョア、よりエゲツナイ収奪者以外になかったのだと思います。

しかし、それはより一層の反革命的堕落であって、仁侠道をとことん否定し去っていく道です。それゆえ、口先でなく、本心から、また事実行為で仁侠道に徹しようとするならば、ヤクザたるオノレにオトシマエをつけ、すなわちヤクザをやめ、真の仁侠道である革命戦士の道を進まざるを得ないのだと思います。

ともに祖国を絞め殺す戦いを！

黒川よりAさんへ

80年10月29日付

お手紙と『リベーロ』№71と切手、10月25日に受けとりました。ありがとうございます。『リベーロ』№71に掲載されている無政府主義者連盟（準）黒旗編集委の、＜「東アジア反日武装戦線」とは何であったのか＞に対して意見を！　ということですが、今回は、初めての手紙ということもありますので、とりあえず、私が、東アジア反日武装戦線へ志願した思想的根拠について、かいつまんで語ることにとどめたいと思います。

《志願の思想的根拠》

『腹腹時計』VOL.1にも書かれていますが、東アジア反日武装戦線の三部隊は、あらかじめ、完成され文章化された綱領を押し立てて、それに全面的に賛成するものが結集して形成された組織ではありませんでした。この点、運動＝組織論的に見て、今でも正しいと思っていますが、つまり、個々人の思想性に立脚し、事実行為としての共同行動と、それを前提した討論（思想闘争）を通して、思想的同質性を相互に形成し、部隊形成－部隊間関係の形成を行なってきた訳です。それゆえ、＜志願の思想的根拠＞という場合も、相互間で共通する部分もあるし、共通項で括れない部分もあります。『腹腹時計』や『反日革命宣言』などで表現されているのは、共通項であると言えますが、共通項では必ずしも括れないものもまた、東アジア反日武装戦線とはなにか？　を知る上で、切り捨て得ないものであると考えます。そういうことから、共通項に関しては、すでに公表されているパンフ等にゆずり、ここでは、私自身のかなり個人的なものに関して確認してみようと思います。

私が、東アジア反日武装戦線に志願した思想的根拠（というよりも哲学的根拠）は、まず、従来のマルクス・レーニン主義を中心とした歴史観や革命観に対する批判

としてありました。つまり「資本主義から社会主義への移行は、歴史的必然である」と言ったような形而上学（「唯物論」とは称しているが、実は観念論そのもの）に満足し得ず、人間の主体的在りようから革命を必然化する哲学こそ確立しなければならない、と考えるようになりました。人間がつくり出す歴史というものは、結果から見れば、それ以外にはあり得なかったかの如くに立ちあらわれますが、しかし、あらかじめレールが敷かれていると言うようなものではなく、人間の主体的活動のいかんによって決定されるのだという考えを得た訳です。だから、たとえ、既成権力を打倒した後であっても、新社会建設の方向を誤まれば、逆もどりしたり、反革命的に堕落したりするのであって、「資本主義から社会主義への移行」なるものは、決して鉄の法則性をもって貫徹する客観的歴史的必然などというものではないということです。それゆえ重要なことは、「歴史的必然」と言うような形而上学に依存し、オノレらの行為を正当化することではなく、あくまでも、オノレの、あるいは組織や社会の在りようの、不断の自己否定にこそ依拠して、現実に生起してくる諸矛盾を、実践的に解決していかなければならない、ということです。この思想を、私は、＜自己否定の弁証法＞と呼んでいます。

この＜自己否定の弁証法＞に依拠して、オノレにとって革命を必然化する出発点は、個々人の在りようを捨象した「歴史的必然」なるものではなく、まさにオノレ自身の具体的在りようです。オノレ自身の具体的在りようとは、オノレの社会的実存であり、日帝本国人としての生活、すなわち、被植民地人民の犠牲の上に成り立っている生活です。かくして、このような日帝本国人としての自らの反革命的在りようを自己否定し、被植民地人民の解放を最優先しつつ、そのなかでオノレ自身をも解放していく戦いこそ、世界革命の前提条件であると、問題を立てた訳です。つまり、＜日帝本国人の自己否定から世界革命へ＞という観点に立つことによってのみ、一国主義や日本民族主義と根源から訣別し、真の国際主義を実現し得るということです。

この＜日帝本国人の自己否定から世界革命へ＞という実践が、主観主義へも客観主義へも陥らないように保障する基準として、対象と主体との＜相互一体的変革の弁証法＞を設定しています。さらに、この＜相互一体的変革の弁証法＞の推進基軸が＜自己否定の弁証法＞であるという円環構造をなしています。この＜相互一体的変革

の弁証法〉とは、オノレがそのなかに住んで生活している世界へ主体的に働きかけること（対象変革）によってのみ、オノレ自身への働きかけが実効性をもち、そのようにしてオノレ自身を変革（主体変革）することを通してのみ、正しく世界を変革し得るのだ、という考え方です。そして、この世界と自己との相互一体的変革の具体的遂行として、武装闘争を軸とした実践を設定した訳です。それは、言いかえるならば、〈自己否定の弁証法〉を基軸とした、物理力をもった実践です。現在、われわれは、これを、反日武装闘争ないしは反日人民戦争と称しています。

マルクス・レーニン主義者にしろ、アナキストにしろ、私が感じるのは、国家をあまりにも抽象的にとらえており、その結果、日本民族主義を克服し得ていないということです。国家は決して、国家一般として存在するのではなく、建国以来の反革命史総体を背負った実体として実存しているのです。そのようなものとして、われわれ日本人に現前している国家は、日本国家であり、より具体化するならば、日本帝国なのです。アナキストは「反国家」とは言いますが、「反日本国家」とは言いませんね。また「国家廃絶」は言っても、「日本帝国撃滅」とは言いませんね。私は、従来のアナキストは、このように、国家規定から〝日本〟という具体性を捨象することによって、オノレの内に〝日本〟を温存し、それゆえ日本民族主義にまるで対決し得てこなかったのだと総括しています。

マルクスが言うように「プロレタリアートは、祖国をもっていない」のではなく、実際は祖国をもっているのです。まずこの現実を確認することから出発しなければなりません。その上で、オノレがそこから生まれた祖国を、原住民を征服・絶滅して建国され、被植民地人民からの収奪によって成り立っている帝国としてとらえ返し、帝国としてしか存立し得ない祖国を、オノレの手で絞め殺すことこそ追求しなければならないのです。祖国を自らの手で絞め殺すことによって、日帝本国人たるオノレの反革命的在りようを自己否定し、人類の本源的共同体よみがえる世界革命の主体へと転生する戦い――それが反日闘争です。

黒旗編集委の『リベーロ』投稿文では、〝革命後の権力問題〟について、問題提起がなされている訳ですが、この点についての私の考えは、次回に展開してみようと考えています。いずれにしても、これを機会に、継続して討論を行なっていくことを望んでいます。ともに祖国＝日本帝国を絞め殺す戦いをめざして。ではまた。

連合赤軍はなぜ隊内処刑を行なったのか？

黒川よりGさんへ

80年9月7日付

9月2日からゼンソク発作が悪化しはじめ、4日にはネオ・フィリン注射をやっても発作が止まらないという重積状態に至ってしまいましたが、5日からプレドニン服用で、今日7日はどうにかもちなおしています。風邪をひいたということでもないようなのですが、梅雨のぶりかえしたような残暑という天候不順が原因のようです。

さて、前回の手紙で、質問のあった「同志殺しの連合赤軍」のことについて若干書きましたが、「同志殺しの連合赤軍」とKF部隊との違いについて、あらためて整理してみます。

「同志殺しの連合赤軍」の当事者で、現在も生きている人たちや、その周辺の人たちの「総括」と称するものなどを読んでみるのですが、結局なにを言っているのか、私なんかにはまったく理解できないのです。なぜ彼らの「総括」が理解できないかというと、まず第一に、自分たちの仲間だけでしか通用しないようなコトバを、説明ぬきで多用し、ことさらにむずかしい文体で書いてあるということです。内容のない文章こそ、権威ぶってへんにかっこをつけているのが鼻につきます。ある程度は新左翼用語になれしたしんでいる私ですら、理解できないような文章な訳ですから、たとえば、日雇のオッチャンなんかには、まるでちんぷんかんぷんではないでしょうか。彼らは、まさに伝えねばならない人々に向けて書くのではなく、結局のところ、今もって、仲間うちで、のしり合い、なぐさめあっているにすぎないのです。

第二に「総括」の内容がまったくもって観念的で、まるでまちがっているということが、理解しがたい原因だと思います。彼らのやっていることは、彼らが行なった事実行為を具体的に分析することによって、論理をすくいとり、原因を極めるというのではなく、すでに破産が

あきらかになっているマルクス・レーニン・毛沢東やらの、既成の理論の権威にもたれかかって、空疎なコトバのつぎはぎと、つじつま合わせで、結局のところ居直っているにすぎないのです。

「同志殺しの連合赤軍」とわれわれKF部隊に共通点を見いだそうとするならば、それは、武装闘争をやるという一点以外にはありません。ほかの点に関しては、ことごとく対立した考えをもっています。一番はっきりしていて、わかりやすいのは、組織というもののあり方でしょう。

官僚組織という絶対服従関係

彼らはゴリゴリのマルクス・レーニン主義者ですから、その組織は、官僚組織な訳です。官僚組織というのは、政治局委員（要するに特権官僚）と、そうでない平兵士とから構成されている組織です。つまり、ブルジョア社会や国家権力組織と同じような階級的差別を肯定し、そういった階級的差別に基づいたピラミッド型の組織です。このピラミッド型組織のなかで、各人は、仲間を蹴落すことによって出世しようとする訳ですから、真の同志関係＝同志愛は成立しません。

これに対して、われわれKF部隊の組織は、官僚組織を否定する水平組織です。階級的差別を認めない組織、すなわち、全員が平等＝同格であって、ある特定の人間が特権をもつことを認めない組織です。

階級的差別を内包した連合赤軍のような官僚組織は、必ず、特権官僚と平兵士との間に矛盾・対立が生じます。国家権力の集中弾圧を受け、追いつめられ、勝利の展望が見い出せない時には、特権官僚と平兵士との間の矛盾・対立は特に激化します。

組織内部に矛盾・対立が生じても、KF部隊のような水平組織では、相互批判を保障した自由な討論と論争によって解決しますから、考え方の対立が暴力的対立や暴力的制裁に至ることはありません。しかし、連合赤軍のような官僚組織では、自由な討論と論争、つまり相互批判によって問題を解決することが保障されていないため、しばしば、考え方の対立はそのままストレートに暴力的対立や暴力的制裁に発展し、敵に向けるべき武器を仲間うちに向けることになるのです。

連合赤軍のような官僚組織では、特権官僚が命令強制権としての権力を握っています。平兵士は、特権官僚に対して絶対服従を強いられています。特権官僚がまちがったことを命令しても、平兵士は自由に意見を言って批

判することができません。もし特権官僚を批判し、あくまでも自分の考えに忠実であろうとすると、暴力的な制裁（リンチ）を受けるだけです。特権官僚は、たとえ平兵士の批判が正しく、自分の方が誤っていると自覚していても、メンツと権威を保つために、自らの誤りは認めようとせず、かと言って理論的に反論できないために、ささいなことであげ足とりをやって、暴力的に口封じをやる訳です。

連合赤軍の場合は、この特権官僚による平兵士へのリンチを「兵士を立ち直らせるための総括」と称して正当化し、兵士殺し＝隊内処刑にまで発展させてしまった訳ですが、これは単に連合赤軍のみの特殊な例ということではなくて、マルクス・レーニン主義の立場に立った官僚組織は、全て、そのような可能性をもっていると言えます。連合赤軍の場合は、単に主観として武装闘争をめざすということではなく、現実に銃で武装していたということ、都市部に非公然の拠点を築けず、国家権力に追いつめられて、人里離れた山岳にキャンプを張っていたこと、革命路線の誤りから勝利の展望を見失っていたこと等々の条件が重なって、貴重な戦力である兵士多数を自らの手でしめ殺し、自滅してしまったということだと思います。

連合赤軍の、特権官僚と平兵士の間には、政治的権利の差別のみならず、さまざまな物質的差別すらあったようですが、このような差別が存在する以上、敵と戦って勝ち得る、真の同志的関係は生まれないと、私は考えています。私は、連合赤軍の特権官僚と平兵士の間には、同志的関係は存在していなかった、と考えています。それは、命令－服従の、支配－被支配関係であって、相互の主体性を尊重し、戦士的同志愛によって結ばれた関係ではなかった、と思います。だから同志殺しではなく、特権官僚による平兵士に対するリンチ殺害＝隊内処刑と言うのが正しい表現だ、と思います。

平等・水平主義とは

エリトリアのゲリラ戦士たちの場合は、幹部といえども衣類は一枚きりで、一般隊員とともに洗面器に盛ったコーリャンを手づかみで食べ、徹底した平等・水平主義を実践しているということです。またニカラグアのFSLNには階級はまったく存在せず、司令官も兵士もすべて平等で、指揮官はいても、服装で区別することは不可能。寝る所も食べるものもすべて同じで、もし占拠した家屋にベッドがあった場合、全員に行き渡る分がなけれ

ば、全員が地べたに寝るということです。

連合赤軍に比べれば雲泥の差です。KF部隊が手本とし、さらに徹底化していくべきなのは、もちろんエリトリアやニカラグアのゲリラ戦士たちの平等・水平主義です。このような水平組織こそが、真に勝利し得るのです。連合赤軍も、口先きでは「隊内共産主義化」を言っていたのですが、実際上彼らがやっていたのは、共産主義化とは正反対の階級的差別化であり、隊内帝国主義化そのものです。

KF部隊の場合、「たとえば『リーダー』を選ぶのもまずいのか？」という質問に関してですが、実際の作戦行動においては、やはり指揮者を選び、部隊全体は、その指揮者の指揮に従って行動する必要がある、と考えています。3人や4人の場合は、あえて特定の兵士を指揮者にしなくとも十分やっていけますが、10人20人というように人数がふえてくれば、必要になってくるでしょう。

ただし、その場合でも、作戦計画の立案や計画の最終的決定に至るまでは、全員の自由な討論が保障されていなければなりません。いったん全員一致で作戦計画が決定されたら、指揮者は、その作戦計画を忠実に実現する範囲内で、責任をもって指揮するということです。また他の兵士は、自らが賛成して決定に加わった作戦計画である以上、それを実現する範囲内で、指揮者の指揮に従わねばなりません。また指揮者ないしは他の兵士に、逸脱や誤りが生じた場合は、可能な場合はその場で、不可能な場合は事後に、相互批判—自己批判によって、逸脱や誤りを正し、次の戦いの教訓としていかねばなりません。

さらに、この指揮者は、作戦行動中のみの存在であって、固定されたものではなく、次の作戦には、選ばれれば再び同一人が指揮者になるだろうし、他の兵士が選ばれれば、他の兵士が指揮者となるというものです。指揮者と他の兵士との間に同志的信頼関係が結ばれていて、作戦計画が全員納得のいったものである以上、他の兵士は、自発的に指揮者に従うということになりますから、命令—服従という支配—被支配関係が発生する余地はありません。

はじめは、志願の時期の早い遅いが生じますから、経験や思想性のズレから、どうしても先輩—後輩という関係ができます。しかし、このズレは、共同行動—相互点検—討論の繰り返しによって解消し得るし、また早急に解消し得るよう、組織として努力しなければなりません。その上で、理想としては、全員が一度は指揮者を経験し、全員がいつでも指揮者になれるように訓練するということです。そのようになれば、たとえ不幸にして戦死者が出ても、その組織は決してつぶれないだろうし、次々と新しい兵士をつくり出し、組織を生きた細胞のように増殖していくことができるでしょう。では、今回はこのへんで。

東アジア反日武装戦線KF部隊(準)刊

☆腹腹時計　VOL2（79・2・28刊）　五〇〇円
反日武装闘争勝利のために(1)、(2)　他
☆腹腹時計　VOL3（80・4・19刊）　五〇〇円
反日人民戦争へ向けた地上—地下陣型の構築を！
☆腹腹時計　特別号1（79・5・19刊）　三〇〇円
FARNの〃戦闘指示〃に応えよう
☆腹腹時計　特別号2（79・9・28刊）　五〇〇円
エルサルバドルRN(民族抵抗)第三宣言　他
☆「反日革命宣言」(79・10・20刊)　発売元＝鹿砦社
—東アジア反日武装戦線の戦闘史—　一五〇〇円
☆共にひとつの闘いを（80・10・21刊）　三〇〇円
獄中兵士書簡集1　反原発の論理　他

KQ通信社刊

☆反帝反日通信　創刊号（79・10・27刊）六〇〇円
—トゥパマロスは勝利する—
☆反帝反日通信　第二号（80・4・10刊）八〇〇円
—フィリピンにおける持久的人民戦争—
☆反帝反日通信　特別号1（80・7・19刊）三〇〇円
FSLN国会占拠・同志奪還作戦　他